

# 写経生の書状

— 正倉院文書にみる古代下級官人の実態 —

桑原 祐子 (奈良産業大学 情報学部)

はじめに

奈良の正倉院には、華麗な宝物とともに、一万数千点にも及ぶ正倉院文書が残されている。その大多数は、東大寺写経所の事務帳簿であるが、帳簿の紙背にある、日本最古の戸籍、税金徴収の台帳である計帳、地方の財政決算報告書である正税帳などの律令公文が夙に有名である。しかし、これらの律令公文は、不要になった後、写経所でリサイクル利用されたため偶然残ったものである。つまり、正倉院文書の中心は東大寺写経所の文書と帳簿なのである。

八世紀の原資料である東大寺写経所の文書や帳簿は、編纂された文献資料では知り得ない奈良時代の下級官人達の役所での生活を様々に語ってくれる。また、彼らの残した書状を読み解くことによって、彼らがどのようにして仕事を得るための努力をしていたのかということも窺い知ることができるのである。

そこで本稿では、天平宝字六年(七六二)(以下、宝字と略す)の勅旨大般若経の写経に携わった秦家主(はたのやかぬし)の書状について、彼が、いつ、どういう立場で、誰に対して、何のために書状を書き記したのかということをも明らかにし、合わせて、古代日本語の実態の観察をも試みる。

## 一 秦家主の啓の背景

秦家主は、経師・校生として、天平十八年(七四六)から宝龜二年(七七一)まで、約四半世紀に亘って、写経所に勤務したベテラン経師である。宝字六年、石山寺増改築に伴って、石山において「勅旨大般若経一部六〇〇巻」写経が行われ、家主はこの写経事業に従事していた。石山寺増改築の担当機関である造石山寺所が発給した文書の写しである(「造石山寺所解移牒符案」)に依って、宝字六年二月八日以前に石山への出仕が要請された

ことが確認できる(一五ノ一四<sup>(4)</sup>)。上日報告(勤務報告)の「移」(一六ノ二ノ三)によると、二月一日から七月二十九日までの上日は、「上日一五三夕一五一」である。平均すると二月〜七月まで、殆ど休むことなく勤務していたことが分かる。八月以降の上日の資料はないが、「石山院大般若経充本帳」(五ノ一〇七〜一〇八)によると、九月六日・十月六日・十一月一日に本経が充本されており、大般若経の書写終了(十一月末頃か)まで石山で写経に従事していたことが確認できる。

この秦家主は、一通の啓を残している。『大日本古文書(編年)』の积文<sup>(5)</sup>を次に掲げる。

謹啓 消息事

- 一 法花経者、以當月廿三日始可奉、
  - 一 先日宣注文選、慇懃欲畫申人侍、紙食料筆墨等、備欲求請、
  - 一 顯无邊經宜渡人々、有暇間、可令奉寫、諸衆人等申、
  - 一 経師闕所、尾張足人預欲仕奉申、
  - 一 若請暇退幸者、若奈良京可入坐事等、在道次可召、
- 想心雖万端、不能書具載、伏乞部下消息、迺曲投一封、死罪頓首謹言、

道守執下  
四月廿日下愚秦家主上

(続修四八) 7 二五ノ三四四

この啓は、秦家主が写経所の様子を道守に知らせたものであるが、年紀を欠いている。啓の文面から年紀を決定することは困難である。左右の接続状況から、年紀を特定することが可能な場合もあるが、『正倉院文書目録』(東京大学史料編纂所)は、接続について何も記さない。つまり、奈良時代に貼り継がれた形跡がないということである。左右の接続状況から年紀の特定はできない。そこで紙背を見てみると、「造石山寺所造寺料錢用帳」

（以下「錢用帳」と略す）の宝字六年三月三十日から四月十三日の部分に相当していることがわかる。この状況から考えると、「秦家主啓」を一次面、「造石山寺所造寺料錢用帳」を二次面と判断し、「秦家主啓」の四月二十日は、宝字六年以前の四月二十日と考えるのが普通である。これまでの先行研究においても、天平二年<sup>9</sup>、或いは天平四年<sup>10</sup>とされている。いずれの研究においても、この啓は、奈良の写経所で書かれた後に石山に持ち込まれ、反故として「錢用帳」に使用されたものであるが、石山で使用された経緯は不明としている。

ところが、帳簿の場合は、記事を日ごとに書き継いでいくのではなく、後から纏めて書き直す（浄書）場合もある。そのことを検討したのが山本幸男氏<sup>11</sup>である。山本氏の分析から「秦家主啓」の紙背部分を写したのは、宝字六年四月二十二日以降であることが判明した。つまり、「秦家主啓」の四月二十日を宝字六年以前の四月二十日に限定する必要はない。宝字六年の四月二十日である可能性が充分あるということである。六年の四月二十日だとすれば、秦家主は石山の写経所で写経に従事していたことは、既に述べた通りである。すると、この啓は、家主が石山の写経所で「道守」に宛てて書き、受け取り先で、その紙背があまり時間をおかずに、造石山寺所の「錢用帳」作成に使用されたということになる。つまり、受け取った道守は、四月二十日頃に造石山寺所に居た人物だということになる。

道守は、しばしば啓・書状の宛名に登場する人物で、写経所の実務に携わっていることが知られている。その道守は、写経所案主の上馬養であったことが、田中大介氏によって明らかにされている（「写経所文書に現れる「道守」について―古代人物論の視座として―」（『続日本紀研究』三三九号 二〇〇二年）。宝字六年、上馬養は石山の写経所の案主（実務担当者）であった。

石山の写経所で写経に従事していた秦家主が、何故、同じ写経所で案主として勤務する上馬養に、写経所の様子を知らせるための啓を書く必要があったのだろうか。

ここで、上馬養の動向を調べる必要がある。山本幸男氏は、四月五日～二十一日の間、造石山寺所案主で、造営担当の下道主が石山を離れ、その間の帳簿への記載を写経所の上馬養に委ねたとする。そのことを端的に示しているのが、「造石山寺所下錢帳」（一五ノ四五七～四六〇）である。六

年四月九日～二十日までの、造石山寺所での錢の収納と支出を日次式に書いた帳簿である。日毎の署名はすべて、写経所の案主上馬養なのである。つまり、四月九日～二十日の間、上馬養は写経所を留守にし、造石山寺所で、下道主の留守番役として、造営の実務に携わって、「造石山寺所下錢帳」を作成していたのである。

上馬養は、写経所を留守にする間、写経のベテランである秦家主に写経所のことを託していたのではないだろうか。それで、家主は、「消息事（写経所の様子）」を上馬養に書き送ったと考えられるのである。写経所の案主が写経所にいなかったから、経師が写経所の様子を案主に知らせる必要があったのである。

ここで、石山の写経所に目を転じてみよう。宝字六年四月の石山の写経所の状況はどうだったのか。二月十一日から始まった勅旨大般若経一部六〇〇巻の写経については、三月二十八日までの間途切れなく充本（手本となる本経を写経生に配布すること）されている（「石山院大般若経充本帳」五ノ一〇七～一〇）。ところが、その後、八月五日まで充本がない。つまり、大般若経一部六〇〇巻の写経は四月～七月の間中断していたのである。三月二十八日に充本された穴太雑物は一五七張写しているもので、一日に七張写すとして、一五七張を写し終わるのに二十二日の日数を要する。丁度、四月二十日頃には、書写が完了していたと推定できる。つまり、写経所のことを託された家主が、造石山寺所に一時的に出席している上馬養に写経所の様子を報告する必然性があるのである。また、経師等は写すべき經典がないから、「ひま」である。写経は出来高払いで布施（報酬）が支払われるので、写すべき經典がない状態は、経師等にとっては、収入がなくなることを意味するのである。

案主上馬養の立場から考えてみると、写経前半の充本を三月中に終わっているから、四月九日以降、写経所を離れて、造営担当の造石山寺所の留守役を引き受けても、問題はなかったのである。

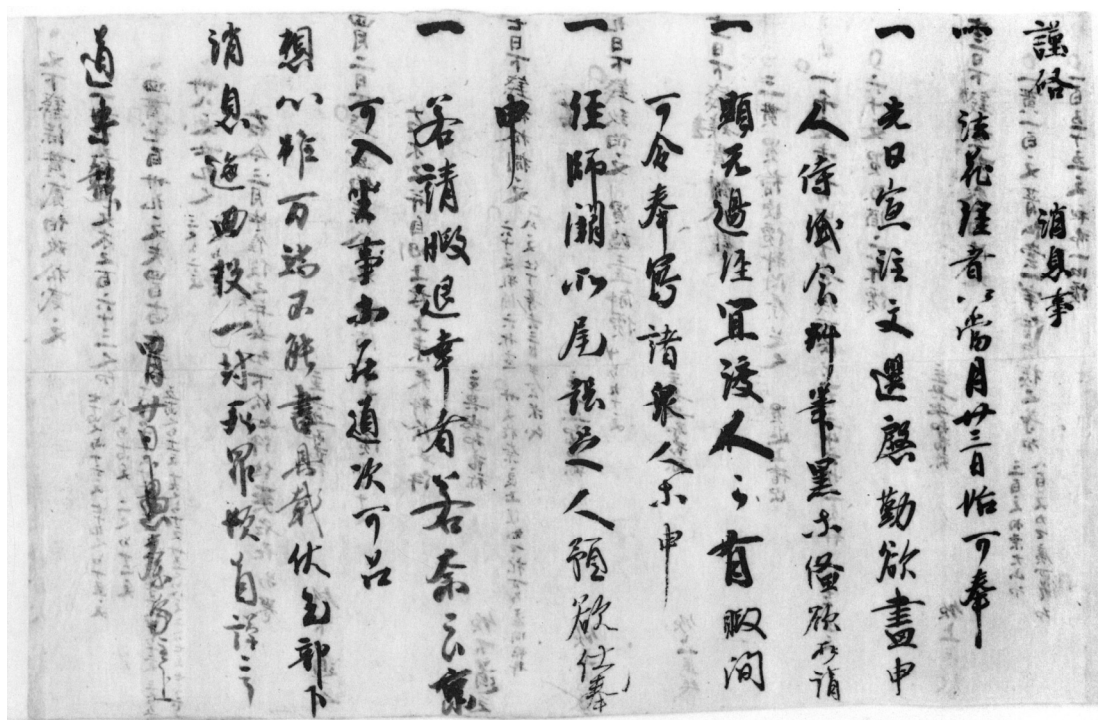
以上、明らかにになった案主上馬養の四月の動向と写経所の状況が、「秦家主啓」が書かれた背景である。このことをふまえた上で、秦家主の啓を読んでみよう。

## 二、秦家主啓の訓読と注釈

秦家主啓の写真・訓読文・注釈を以下に示す。

写真

(続修四八7)



訓読文

謹みて啓す。消息の事

- 一 法花経者、当月廿三日を以て、始め奉る可し。
  - 一 先日の宣の注文選は、慰勤に画か欲と申す人侍り。紙・食料・筆・墨等を備むと欲す。請ふ所なり。
  - 一 頭无边経は、宜しく渡すべし。人之暇間有れば、諸の衆人等をして写し奉ら令む可しと申す。
  - 一 経師の闕く所は、尾張足人 預め仕え奉ら欲と申す。
  - 一 若しくは暇を請ひて退り幸まし、若しくは奈良京に入り坐す可き事等在らば、道次に召す可し。
- 想ふに心万端と雖も、書き具に載する能はず。伏して、部下の消息を乞ふ。進曲すれど一封を投ず。死罪頓首謹みて言す。

道守執下

四月廿日 下愚 秦家主 上る

注釈

▼啓 公式令に定める啓は、皇太子(三后)の承認を得る場合に用いられる公文書であるが、正倉院文書に見られる啓の多くはそうしたものでなく、個人もしくは官司が差し出す上申文書や書状であるとされる。

▼消息 様子のこと。ここでは、奉写勅旨大般若経所、或いは奉写石山院大般若所等と称される石山の写経所の様子のことと解する。その理由については後述。

▼当月 この啓の差出しが四月二十日であるから、「当月二十三日」は四月二十三日である。年紀は、先述の通り、宝字六年である。

▼始可奉 「法花経の書写を始める」意に解したいが、それならば、「可奉始」とあるべき。語順が逆転したか。宝字六年四月頃に法花経の書写を示す資料は管見に及ばない。三条目に話題となる「頭无边経」と「法花経」がセットの用度申請の解の断簡(二五ノ三四五ノ三四六)があるが、年紀を欠き、いつの写経なのか特定する手がかりが無い。

▼注文選 文選の李善注か。正倉院文書に文選李善注の抜書が残っている(続々修四四ノ一〇裏28)30『大日本古文書』未収)。

▼**慇懃** 奈良時代の和語は「ネモコロ」である。『万葉集』一七二三番に「河蝦鳴く六田の河の川楊の根毛居侶見れど飽かぬ河かも」とある。

▼**紙食料筆墨等備** 写経所に私的に写経等を依頼することは、様々な資料から確認できるが、その際、依頼者は、必要経費を写経所に差し出すことになっている。紙・筆・墨から食料、写経生への布施（報酬）などである。ここも、おそらく個人的な注文選書写の依頼に対して、書写する人がいるので、必要な物品を請求して欲しいと言っているかと解せる。『大日本古文書』は、「墨等」と「備」の間に句読点を施すが、連続させて訓読した。

▼**所請** 『大日本古文書』は「求請」と翻字するが、写真の字形から「求」でなく「所」の字形に近いと判断し、「所請」として訓読した。

▼**渡** 頭无边経の本経を写経所に渡して下さいという意か。

▼**人之** 『大日本古文書』は「人々」と翻字するが写真で明らかな様に、「々」ではなく「之」である。

▼**暇間** イトマと訓読し、ひま、時間にゆとりのある様を表現していると解釈する。正倉院文書で「暇」とあれば、「休暇」を意味することが多いが、ここでは、石山の写経所の宝字六年四月下旬の状況と文脈から、大般若経の前半期の書写が一段落して、次の本経が渡されていない状態、つまり、「仕事と仕事の間の何も無いとき」の意を表現していると解す。

石山の写経所では、大般若経以外に理趣経二巻と観音経百巻の書写を行っている。理趣経二巻は、二月十一日に充本されているので、四月までには終了している。観音経百巻の書写は、七月二十五日までには終了している（続修九裏 6・7）『大日本古文書』未収）。四月下旬から七月二十五日の間に、観音経百巻（五ノ四五七〜四五八）を六人（☆印の人物）で書写したとしても、五月下旬までには終了してしまう。従って、石山の写経所としては、四月二十日時点で、この先あまり仕事のない「ヒマ」な時期になると予測されたのである。

二月十一日から四月下旬までの大般若経書写の前半期に、写経を行った経師一〇人と、書写した二十五帙を示す。観音経百巻を写した経師は六人である。

淡海金弓（1・2・21）

山下老（3・12・22）

☆穴太雑物（4・13・23）

☆鬼室石次（5・14・24）

☆秦家主（6・15・25）

☆張兄万呂（7・17・27）

☆張布治万呂（8・18・28）

古月足（9）

大窪石弓（10・20）

☆信濃虫万呂（16）

（ ）内は、帙を示す。

☆は観音経百巻を書写した経師を示す。

資料は、「石山院大般若経充本帳」（五ノ一〇七〜一一〇）と「写経料紙充用注文」（五ノ四五七〜四五八）である。

また、「暇間」に対して、「イトマ」と訓読する例が、『続日本紀』慶雲四年七月壬子（十七日）条の宣命第三詔に「朕御身勞坐故、暇間（いとま）得而御病欲治。」にある。「暇」は正倉院文書では、休暇の意で用いられる。休暇の意で「暇間」を用いた例は、「請暇不参解」二三〇通余の中にはない。この「秦家主啓」の五条目の「若請暇退幸」の「暇」は、「休暇」の意に解せる。家主は、「休暇」と「時間のゆとり」の意の「イトマ（暇間）」とを表記上書き分けたのではないか。

▼**経師関所** 「石山院大般若経充本帳」によると、経師の一人古月足は、二月に第九帙を書写し、三月二十四日に第十九帙を充当されたが、書写しないで石山を去っていることが分かる。このように、石山の写経所で経師の欠員が生じているということである。

▼**尾張足人** 経師。宝字二年から景雲元年の間にその名が見える。宝字二年散位寮少初位下とある。宝字二年・五年には経師として写経を行ったことは資料上確認できるが、六年に石山の写経所で写経に従事したことは資料上確認できない。「石山院大般若経充本帳」によると、八月以降の後半期に、中臣鷹取・岡大津・大友路万呂らが新たに参入していることがわかる。つまり、石山写経所では経師を増員する必要があったが、尾張足人の採用は、聞き入れられなかったということであろう。

▼**預欲奉仕申** 「申」の主語は、尾張足人であろう。「預…申」で、「かねてから（尾張足人が）石山写経所に出仕したいと申しています。」の意と解した。

▼**請暇退幸** この「暇」は休暇の意と解す。主語は道守（上馬養）。「（あなた様が）休暇をとって、（奈良に）ご退出あそばすことがございましたら」の意であろう。「幸」は、道守に対する敬意表現である。「退」の主語は道守であるから、「退」を尊敬表現にするために「幸」を付けたと考えられる。

同様の例を正倉院文書中では検出し得なかったが、『古事記』では、「遷幸・登幸・到幸・越幸」等の例があり、「イデマス」と訓じている。『古事記』の場合その動作の主体は、天皇及びそれに準ずる人物である。

▼入坐 「道守が、出張か何かで」奈良の京へお入りになることがございましたら」の意と解す。「坐」は、尊敬の意を表す補助動詞と解す。道守の行為「入」に対する尊敬表現である。「坐」についての同様の例は、「造石山寺所解移牒符案」の中に三例ある。二例（一五ノ一六九・一七〇）は、良弁に対する尊敬表現である。一例（一五ノ二二九）は、安都雄足に対する尊敬表現である。

▼召 秦家主が、道守に対して「尾張足人を」お召し下さい」と依頼しているであろう。

▼伏乞部下消息 「部下」は配下の意であるが、「道守の配下」なら、写経所のことになって、文意が通じなくなるので、ここは、「そちらの様子をお知らせ下さい」という意で表現していると解す。

▼進曲 「進」は「斜めに進むこと」。「進曲」で「手紙の内容が曲がりくねっています」の意であろう。「充分に意を尽くしていません」という謙遜の表現である。「進曲」は、『大漢和辞典』や『漢語大詞典』に熟語として掲出されない。

▼死罪頓首 死罪も頓首も共に書簡文や上表文の冒頭や終わりにつける書簡用語である。死罪は死に相当する意で、失礼を詫びる気持ちを表す。頓首はぬかずくの意で、相手に対して敬意を表す語。この書簡用語や、「想心雖万端、不能書具載」「進曲投一封」等も書簡特有の表現である。

▼下愚 差出所の自己につけた謙称。

▼執下 充所につけられた脇付。「下愚」と共に書簡特有の語であり、これらが付されたことによって、家主が書状（書簡）としてこれを道守に送ったことが分かる。

### 三、秦家主啓の位置づけ

以上の検討から、内容は五条にわたることが分かる。以下の如く理解できよう。

a 法花経の書写開始の報告

b 注文選を書くための用度請求（書写の希望者がいる）

c 願无边経の本経の請求（経師等がヒマなので、写経をしたい）

d 経師の人事（尾張足人が写経を希望しているので、召喚してやって欲しい）

e 召喚の希望（奈良に出向いた折りに、尾張足人を召喚して欲しい）

bは、私的な依頼による書写であろう。

先に示したように、a・cの写経に関する資料も殆ど無いに等しい。石山の写経所（奉写勅旨大般若経所）で、公的に写すべき經典としての大般若経一部六〇〇巻・理趣経二巻・観世音経一〇〇巻の写経事業は、「石山院大般若所充本帳」や「造石山寺所解移牒符案」中の「造石山院所解 申考 中行事事」（続修九裏<sup>6</sup>『大日本古文書』未収）で確認できるが、法花経・願无边経の写経は、「行事」の中には含まれていない。或いは、石山寺造営に関連する写経とは別に作成されたため、一連の石山寺造営関係資料群の中に残らなかった可能性も考えられる。本来は、奈良の写経所で行われるべき間写経<sup>12</sup>のようなものであったかもしれないが、このとき石山の勅旨大般若経写経のため、奈良の写経所は開店休業状態であったので、奈良の写経所が行うべき間写経を石山で行っていた可能性が高い。そのように考える根拠は、経師等の上日報告に示される写紙数の多さである。

〔造石山寺所解移牒符案〕の中に、経師の上日報告（十六ノ一〜三）がある。期間は、二月一日から七月二十九日である。この間の写経は、大般若経の前半期の二五帙分と観世音経百巻である。各々、経師ごとの写紙数がわかるので、合計して、上日の写紙数とつき合わせてみる。秦家主と張布治万呂の場合を検討する。充本帳の写紙数は「定」の写紙数で計算する。

秦家主 大般若経五三一張（六・一五・二五帙）

観世音経 四〇張（八巻分）

合計五七二張

上日報告 六五〇張

差 七八張

張布治万呂 大般若経五三三張（八・一八・二八帙）

観世音経 四〇張（八巻分）

合計 五七三張

このように、上日報告を見る限り、大般若經・理趣經・觀世音經以外に、何か写経していた可能性が考えられるのである。その中に、秦家主啓で話題になっている、法花經や顯无边經があつても不思議ではない。

いずれにせよ、四月下旬以降は書写すべきものがないと、経師等は布施が得られないのである。だから、注文選も写しますよ、顯无边經も写しますよ、どしどし仕事を回してくださいという希望を、秦家主は経師を代表して書き記したと解釈することができよう。

d・eは、経師仲間である尾張足人の個人的な依頼を、案主である上馬養に取り次いでいる内容である。家主は、石山の写経所で三月末には経師に欠員が生じていることを承知しているので、尾張足人を採用するように働きかけているのである。さらに、「尾張足人を採用してくださるならば、休暇で奈良にお帰りになるときにでも、或いは出張で奈良の京へお入りになることがございましたら、道中でもかまいませんので、召喚してやつてくださいませ。」と丁寧な文言（退幸・入坐）を連ねてお願いをしている。つまりa～eのうち、純然たる業務報告はaだけといつてよいであろう。b・cは写経所の請け負った仕事であるから、業務に関する内容であるが、経師等を代表してのお願いの比重が高い。d・eは個人的に頼まれたお願いである。

また、純然たる業務報告なら「解」の形式で書くのが通例である。例えば、造石山寺所が造営の総指揮官である東大寺上院の良弁に、造営の進捗状況を知らせた文書は、「造石山寺所解 申消息事」で始まり、書止めは「以前消息、附秦足人、申上如件、以解。」とあり、公式令の解の形式をとる。石山造営に関して「消息事」と記される業務報告の文書は他に四通ある。このうち三通は「解」の形式である。

この文書を出した四月二十日は、勅旨大般若經書写の前半期の終了時期である。先に指摘したように、家主は、写経所を留守にしている案主に写経所の様子（消息）を知らせる立場にいたと推測される。だからこそ、解文に特有の「ゝ事」という事書に、「消息事」と書いて差し出していると考えられる。ならば、なぜ「解」の形式をとらなかったのか。

家主にとっては、表向きは「消息事」であっても、経師を代表して仕事

をもらうための依頼や、尾張足人の個人的な依頼の取り次ぎをすることが、この文書の本当の目的であつたのであろう。だから「解」ではなく、「啓」の形式をとり、書簡に特有の書止の表現「想心雖万端、不能書具載」や「迤曲投一封、死罪頓首謹言」、さらに充所に脇付を付したり、差出所に謙称を付したと思われるのである。

文書の前半部は、職務上の業務報告の体裁と内容を備えているが、後半部は個人的なお願いを含む、依頼を主とする内容になっているのである。文書の書式という視点で見ると、公式令で定める解の形式と、個人の出す書状の形式とが混じり合つた形態になっているといえよう。

また、公式令で規定される「解」には見られない、敬語表現（侍・幸・坐）が使われるのも、書状であることばかりではなく、依頼を主とするために生じた特徴といえるのではないだろうか。

## まとめ

以上、「秦家主啓」の背景を検討し、訓読と注釈による内容の検討を行うことによって、誰が、いつ、どういう立場で、誰に対して、何のために啓を書き記したのか、ということ明らかにした。以下に整理する。

\*誰が・・・・・・石山の奉写勅旨大般若所で写経に従事していた写経生秦家主が

\*いつ・・・・・・勅旨大般若經の前半期の書写が一段落し、写すべき經典がなくなりつたあつた宝字六年四月二十日に

\*どういう立場で・・・・・・写経生であるが、一時的に写経所の留守を預かる立場で

\*誰に・・・・・・石山寺造営機関である造石山寺所の留守を一時的に預かつていた写経所の案主上馬養に

\*何のために・・・・・・写経所の様子を知らせるため、さらに、写経生を代表して仕事を貰う依頼のため、加えて、尾張足人の

採用依頼のために

解ではなく、書状として「啓」を書き記した。

一見すると無味乾燥な文書であっても、個々の文書の背景や、その文書の置かれた状況を明らかにすることによって、古代下級官人達の役所での

実態が垣間見える。下級官人同士の情報のやりとりや上司への取りなし方等、生の人間関係が明らかになってくる。さらに、その人間関係を反映させる言語表現が、特に啓や書状<sup>13</sup>の中にはよく現れる。日本語固有の文字を持たなかった八世紀の日本では、漢字・漢文で書くことが唯一の書記言語であり、当然のことながら正格漢文が指向される。しかし、日本的な人間関係の中で表現される日本語は、中国の漢文の格の中にはめ込むことはできない。従って、破格の漢文を生じさせることになるのである。我々はここにこそ、生きた古代の日本語の姿を観察することができるのである。

## 注

(1) 正倉院文書は、奈良正倉院に伝来した奈良時代最大の第一次資料群である。東大寺写経所の残した文書帳簿をその中心とする。現在、正倉院古文書四五卷(正集)、続修正倉院古文書五〇卷(統修)、続修正倉院古文書後集四三卷(統修後集)、続修正倉院古文書別集五〇卷(統修別集)、正倉院塵芥文書三九卷三冊附蠟燭文書一袋(塵芥)、続々修正倉院古文書四四〇卷又二冊(続々修)、合わせて六六七卷五冊が正倉院文書として中倉に収蔵されている。これが狭義の正倉院文書である。一般に正倉院文書と称する場合は、狭義の正倉院文書に、献物帳・曝涼帳・出納関係文書・丹裏文書等の北倉文書や宝物に付随した文書・庫外流出文書・東大寺献納文書等を加えたものを指すこともある。広義の正倉院文書である。古代史や国語史の研究史料として、正倉院文書と称するときは、狭義の正倉院文書を指す。また、正倉院文書の大半は、『大日本古文書(編年)』二五冊に収録されている。

(2) 東大寺写経所と称される機関は、光明子家の写経組織から皇后宮職管下の写経組織、さらに金光明寺写経所、造東大寺司写経所へと変遷した写経組織である。代表させて東大寺写経所とした。写経所の変遷については、山下有美氏『正倉院文書と写経所の研究』(吉川弘文館 一九九九年)に詳しい。

(3) 資料の名称は、正集・統修・統修後集・統修別集・塵芥所属のものは、『正倉院文書目録』(東京大学史料編纂所)の名称に従い、「」を付す。それ以外は、『大日本古文書(編年)』の名称に従い、「」を付す。

(4) (一五ノ一四二)は『大日本古文書(編年)』卷一五の一四二頁であることを示す。

(5) 『大日本古文書(編年)』の釈文には翻刻の誤りがあるが、ここではそのまま掲げる。訂正は二、**秦家主啓の訓読と注釈**において示す。

(6) (統修四八<sup>7</sup>)は、正倉院文書の所属を示し、続修第四八巻の第七紙であることを示す。

(7) 正倉院文書の紙背に注目した天保・明治の整理成巻によって、写経所の残した文書帳簿は破壊されてしまった。これを奈良時代の姿に復原するためには、原本調査による断簡の接続情報が不可欠である。この原本調査の成果を公刊したのが『正倉院文書目録』である。

(8) 『南京遺芳』の解説補注。岡藤良敬氏『日本古代造営史料の復原研究』第十一章銭用帳の表裏関係。山本幸男氏「造石山寺所の帳簿に使用された反故文書」の「図1帳簿の作成と反故文書の使用」では不明の中に入れる。

(9) 『南京遺芳』の解説補注は、「文中に尾張足人が経師として仕えたいと申しいているくだりがあるが、宝字二年六月には足人が経師として見えるので、この啓はそれより前、さほど遡らぬ時期のものと推定される。」とする。

(10) 岡藤良敬氏は『日本古代造営史料の復原研究』の中で、「秦家主啓」について、「年次は不明だが、記載内容から宝字四年の法花経書写に関連かとみられるので…」と、宝字四年と推定する。しかし、宝字四年の法花経書写は、四月一日が写経の宣で、四月二十六日付で布施申請が出されているので、四月二十三日から開始というのは、時間的に難しいので、宝字四年の推定には問題があろう。

(11) 山本幸男氏「造石山寺所の帳簿―筆跡の観察と記帳作業の検討―」(『相愛大学研究論集』<sup>14</sup>(1)(2)、15(1)、一九九七、一九九八)

(12) 菌田香融氏『南都仏教における救済の論理(序説)―問写経の研究―』に、「天平期の中央官営写経所では、歴代御願の一切経の書写を主たる任務としてきたが、

それを当時の古文書では「常写」とよび、これと平行して行われる一切経以外の臨時の写経を「間写」とよんだことが知られている。」とある。

(13) 正倉院文書の啓・書状については、黒田洋子氏によつて、その訓読と注釈が試みられている。『正倉院文書の訓読と注釈―啓・書状―』(平成十九年度科学研究費補助金 基盤研究C「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」研究成果報告書Ⅱ 代表桑原祐子)に正倉院文書中のすべての啓・書状の訓読と注釈を収録し、正倉院文書の啓・書状の特徴についての考察が纏められているので、参照されたい。

#### 〔付記〕

本稿は科学研究費補助金基盤研究(c)「正倉院文書による日本語表記成立の解明」(研究代表者 桑原祐子)による研究成果の一部である。